

2014年度学院留学 研究成果概要

種 別：学院留学（短期）

所属・職・氏名：人間福祉学部・准教授・村上 陽子

研 究 課 題：メデジンおよびボゴタのスペイン語の特徴記述～おもにポライトネスに関して

留 学 期 間：2014年8月31日～2015年3月11日

留 学 先： コロンビア・メデジン市
アンティオキア大学

研究成果概要

貴重な留学の機会をいただき達成することが出来た成果について、今後の研究の方向性の観点から報告を行う。

1. 現代スペイン語における現在進行形に関する研究

ここ近年、現代スペイン語における現在進行形(estar+現在分詞)を研究テーマとして文献研究、コーパス分析、アンケート調査などを実施し、多用されるこの表現形式の様々な用法を記述し、特にアルゼンチン、コロンビアなどで見られる未来の事態を表す用法について調査を行ってきた。これまでの研究について留学中の所属先であるアンティオキア大学コミュニケーション学部社会言語学研究科で、二度、研究発表を行う機会を得、自らの研究について見直しを行った。新たに見つけた文献やメデジン市の話者のスペイン語を観察して得たデータから、先行研究において未来の事態を表すとされ、私自身もそのように考えてきた用法は「未来」ではなく「未来まで引き伸ばされた現在(presente prolongado)の事態を表しているとの見解に至った。アンティオキア大学での研究発表では、多様な研究分野の研究者から様々な指摘やコメントをもらい、それらを参考にしつつ新たに獲得したデータの分析とその考察について論文にまとめていく段階に至っている。

近年、スペイン・アルカラ大学の呼びかけで、スペイン語圏の数々の都市在住の研究者らの手によって口語コーパス(Preseea)が作成されており、所属先でも「メデジン市の社会言語的コーパス」が作成された。そのコーパスを分析対象として、話者の年齢、社会階層、学歴と言った社会的属性の見地から現在進行形の用法記述を行うため、用例を抜き出す作業を開始し、現在も引き続き行っている。その他の都市のコーパスに関しても同様の分析を行えば、単なる一都市の研究にとどまることなく、比較研究に発展させることが可能であると考え、今後も継続的に行っていく予定である。

2. 現代スペイン語の待遇表現に関する研究

スペイン語のポライトネス研究のテーマのひとつとして、聞き手を表す待遇表現がある。以前、植民地時代の書簡、公的文書などの待遇表現について分析を行い、コロンビアの首都ボゴタと近隣地域に現在も残る待遇表現 *su merced* の生起過程を探る研究を行った。留学地のメデジン市は、現代スペイン語においては通例、二種類である単数の聞き手を表す待遇表現 (*tú, usted*) が三種類 (*tú, usted, vos*) 存在する地域であり、先行研究も充実しているのだが、先行研究の多くがアンケート調査に基づいた数的分析を行っている。今回、メデジン市のスペイン語話者の待遇行動を観察し、インタビュー調査を行ってみると、数的分析では拾いきれない複雑かつ重要な言語的現実が存在することが分かった。この間隙を埋めるためのひとつの研究方法として、待遇表現を用いる言語行動のエスノグラフィ記述があると考えられる。エスノグラフィの手法に関する文献研究などをさらに深め、調査協力者の一定期間の待遇表現使用の実態を記述し、現在までの待遇表現研究において伝統的に要因とされてきている「心的距離」による使い分けという見地だけでは浮かび上がらせることができない現象を明らかにしていきたい。

待遇表現に関しては、今回、もうひとつ調査を実施した。公共の場に見られる看板において、どのような待遇表現を使って指示や依頼を行っているか、留学地であったメデジン市に加えて、20年近く前に修士課程を行うために留学していた首都・ボゴタ市において、データ収集を実施した。現在、収集したデータ分析の途上ではあるが、*vos* というボゴタ市では使用されない待遇表現を日常的に用いるメデジン市であっても、2例を除いては公共の場の文書では *vos* 以外の待遇表現 (*tú, usted*) が使用され、ボゴタ市における使用状況と大きな差異は見られないことが現時点で判明してきている。今後、用例を依頼、案内などの意図や、公園、教会など用例を含む看板の置かれている場所などのいくつかの点で分類し、待遇表現との関連性を探る。

3. スペイン語教育に関して

スペイン語教育に関しても留学期間中にいくつかの成果を得ることができた。ひとつは、毎年9月後半に開催されるため本学での授業開始と重なり、今まで参加することができなかった「外国語としてのスペイン語教育学会 (ASELE)」が2014年9月にマドリードで開催した第25回大会に参加し、発表を行うことができた。発表のテーマは「学生の学習モチベーションを高める活動とその双方向的効果」であった。スペイン語を履修し学習する学生たちに自主的にスペイン語を学び、自分の勉強方法などを振り返る機会を与える活動として近年行っている「学生による小テスト作成アクティビティ」において、学生から提出された彼ら自身が作成した小テストと、同時に提出することを義務付けている「小テスト作成レポート」の内容を分析した結果を発表した。作成された問題の内容や作成レポー

トにつづられている事柄を分析から、小テストを作成するためにはしっかりとした自学習が必要になる点、「出題する内容＝重要な箇所」を自分で考えなければならない点が学習効果を高めること、また、多くの学生たちが「文法重視」でありながら、「通じればよい」と考えているなど、「学習信条」について、また、アクティビティの欠点とそれを改善する方法の提案もあわせて示し、会場からはアクティビティの有用性を指示するコメントや、日本でスペイン語を学ぶ学生たちに関する質問が相次ぎ、大変有意義な発表となった。

次に、メデジン市にある EAFIT 大学の外国人コースの教員向けに、母語のスペイン語学習への影響について講演を行った。それを機に、外国人向けスペイン語授業の見学をし、授業教材や授業中のアクティビティに関して学ぶ機会を得た。学習言語が話されている地域で行われる授業と、母語環境における授業には違いがあつて当然であるが、異なる環境下における教育上の共通点は外国語教育の根本的な事柄であることを再認識し、今後、自らの授業展開だけでなく、本学におけるスペイン語教育に役立つ体験となった。

最後に、今回の留学中に日々、目にするスペイン語を観察していて、近々の課題としてやる価値があると考えたのは、修士論文と博士論文で扱ったボゴタ市のスペイン語における英語借用語についてである。10 年前に執筆した博士論文では、カロ・イ・クエルボ研究所が行ったボゴタ市出身・在住の教養層のスペイン語話者の語彙に関する調査をコーパスに、どのような英語借用語がどれほど使用されているかを調査し、それらの定着度について言語内のおよび外的観点から分析した。10 年経った現在、現在も使用されている英語借用語はどれか、また、当時、考察した定着度を測る方法が適切であったかどうかを再調査すれば、通時研究として興味深い現象が観察されるでないと考えられる。

以上が研究成果の概略である。半年という短期間に、自らの研究の進展がもたらされたことはもちろん大きな成果であるが、言語研究者にとっては、日々、生きたスペイン語の中に身を置き、様々な研究の種を見つけられたことや、現地の、また、学会や集中講義に来ていた研究者たちと出会い、交流することが出来たことはこの上ない成果であり、今後の研究生活にとって多大なる礎を獲得することが出来た。留学と言う素晴らしい制度が準備されていることにはもちろんであるが、受け入れ先となってくれたアンティオキア大学の研究者の皆さんに心から感謝したい。